

菩薩ぼさつや仏さまやっの八つの修行の実践である「八大人覺はちだいにんがく」は、仏教徒には大切な自己管理の生き方となります。

その中の一つ、少なく欲ほっするという字を書く「少欲しょうよく」は、言葉だけで考えると「必要以上に欲しがらない」とか、「最低限の欲おさで抑える」という意味にとられがちです。

ある意味では正しいでしょう。しかし、それが得られなければ生命に関わる何かを求めている人に対して、「多くのぞを望むな、現状に満足しろ」とは言えないでしょう。

例えば、喉のどが渴かわいて生命いのちが危うい時に「現状に満足しろ」と他人や自分に言い聞かせる事はできないようなものです。生命いのちを保つために最低限必要なものを求めるのは、欲とは別のものです。

生命いのちに関わる物が足りなければ、苦しみにつながり、自己存在を危うくしてしまうことになり、現実を正しく見る姿勢しせいや判断はんだん、正しい生き方などを失ってしまうことになるのです。ですから、生命いのちの危険を感じるような苦しみに自ら身を置いてはならないのです。

苦しみと対極たいきょくにある快樂かいらくもまた、正しいことから離れさせてしまいます。その飽くこと無く快樂などを求める心よくを欲しょうよくと言いますが、「少欲」はその欲をととのえる自己管理の生き方なのです。守らないからといって他人から責められるようなことではなく、自分から仏さまや自分自身ちかに誓じっせんって実践する「仏の道ほとけ みち」なのです。

「仏の道」とは、「仏さまなに成る道」であり、「仏さまなに成っている道」なのです。

欲するがままにまかせていると、そこには何れ苦しみいすが伴ともないます。この欲から離れ、苦しみから離れる生き方こそが、「仏さまなに成っている」生き方なのです。

「少欲」とは、私たちの環境や条件や都合ではなく、欲によって生まれる「苦しみ」を伴わないように生きていくという、自分自身に向けられた、仏さまや自分に対する誓いであり、生き方なのです。